神戸新聞 2021年12月23日 木曜日 面名 夕一 夕4 1ページ

随想

叩け、外務省の扉

山上　信吾

「外務省に入って一番やり甲斐を感じたのは、どんな瞬間ですか？」

東大公共政策大学院で国際法のゼミを担当していた頃、教え子から尋ねられた。キラキラ輝く目にたじろいだ。学生の青雲の志に押されたものの、他省庁との間で就職先を迷っている新卒学生を何度も「籠絡」してきた経験に救われ、お茶を濁した。でも、真摯な問いかけは心に重く残った。

課長、審議官、局長と官僚機構の階段を上るにつれ、見晴らしは良くなると信じ、期待もしてきた。責任は重く、裁量は広がった。だが、見たくないものも見えてきた。永田町の風に右顧左眄しての鞠躬如。前捌きと安易な妥協への傾斜。凜として主張を貫くことができない知的怯懦。最近、某省次官が自らを政治の「犬」と称する寄稿を見た。世も末だ。

そんな思いで在外公館での最後の奉公に出た今、大使の仕事は新鮮だ。日豪関係は日々強化され、日本を見る豪州人の視線は熱い。大使は、「日本」のセールスマン。抱える商品は、比類無く上質だ。

かつて、「戦艦」と称された外交官がいた。一騎当千の交渉上手であったと語り継がれている。まさに、外交の醍醐味。外交官の主戦場は霞ヶ関でなく在外なのだ。

「我こそは」という若者こそ、外務省の扉を叩いてほしい。「敗戦の桎梏から日本外交を解放する」「足して二で割るだけが外交ではない」との入省時の思いは、いまだ満たされていない。後進に期待するところ大だ。

9月に還暦を迎えた。何事にも終わりがあることを悟ってきた。だからこそ、飛ばしている。いつ終わりが来ても、悔いを残さずにバトンを引き継げるよう、力の限り駆け抜けたい。

（駐豪州日本大使）

(C)神戸新聞社 無断転載 複製および頒布は禁止します。